新病院長に聴く

第14回

独立行政法人国立病院機構
岩国医療センター院長
青　雅一　先生

今回の「新病院長に聴く」は、2020年４月１日に独立行政法人国立病院機構岩国医療センターの病院長に就任されました青　雅一先生にお話をいただきました。

なお、通常であれば直接先生にお会いしてインタビューさせていただくところですが、新型コロナウイルス感染症の流行もあり、事前の質問に対してお答えいただいたものを掲載することをお断りいたします。

広報委員　岡山　智亮

１.まず、病院のご紹介をお願いします。

岩国医療センターは、病床数530床で33の診療科を標榜し、高度急性期医療を担う地域の中核病院です。岩国市を中心に広島県・島根県の一部、山間僻地、有人離島を含む半径40km、人口約40万人の医療圏において唯一の救命救急センターを有する医療センターで、地域医療支援病院となっています。また、地域災害拠点病院の指定を受けており、２・３次救急医療及び災害医療の要として機能しています。また、320列と80列のCT scan、3.0テスラのMRI、PET-CT、IMRT（強度変調放射線治療）の他、手術室にはda Vinci、据置型血管撮影装置を備えたハイブリッド型手術室など、最新鋭の医療機器をそろえています。

がん診療提供体制については、地域がん診療連携拠点病院として、各種がん診療において地域の中心的な役割を担っています。さらに、山口県東部で唯一のがんゲノム医療連携病院でもあり、一人ひとりのがん組織を遺伝子レベルで解析し、患者さんにより適した治療薬の情報を提供できるようになりました。

近くには米軍基地があり、病院の近くには将校や幹部の住宅があります。駅周辺の繁華街には、米兵や軍関係の仕事をする外国人を大勢見かけます。外来には基地の住人が通訳付きで受診し、病棟にも常に数人の外国人が入院しているという国際色豊かな病院です。初期臨床研修医は毎年10名前後受け入れていますが、令和４年度は12名フルマッチとなりました。研修医は米軍基地内のクリニックでの研修（２か月間）を選択することもできます。

当院は岡山大学の関連病院で、救急科（山口大学から）と腎臓内科以外は、ほぼ全員が広島を越えて岡山大学から派遣されてきます。人手不足のため非入局者を受け入れている診療科もありますが、ほぼすべての診療科の医師は岡山大学の人事で動いています。その中で私だけがフリーランサーで、14年前に形成外科新設のために引き抜かれたという格好で岩国の地に単身赴任でやってきました。

２.病院長としての抱負をお聞かせください。

当院の使命である高度急性期医療、救急医療体制のさらなる充実を図るとともに、未来の優れた医療人を育成する医療施設として整備していく。そして、地域の皆様の幅広いニーズに応えられるよう、地域の医療機関と密に連携して地域に根差した地元完結型の医療を目指しています。

課題としては、「医師不足をどうするか？」ですが、ここを解決しないと、現在進めている「働き方改革」もうまくいきません。当院の常勤医は80名前後しかなく、病院の規模からみれば1.5倍は必要です。中でも精神科の常勤医がいないことは救命救急センターの運営上にも支障をきたしています。また、非常勤医師だけに頼っている診療科が複数あり、こちらの強化も喫緊の課題です。

３.岩国市を含め県東部の医療について思うことはありますか。

岩国市、特に玖北地区の高齢化が著しく、人口は毎年減少傾向です。そのため救急搬送される高齢者の割合が年々大きくなっており、３次救急の搬送数も少しずつ増加しています。また、当院の診療圏には夜間に救急患者を受け入れる施設が少なく、特に深夜の救急搬送は当院に集中します。１～３次救急のほとんどが当院を受診するため、スタッフが疲弊しています。新型コロナウイルス感染が拡がってからの２年間をみると、１次救急の件数が激減しています。

山口県東部には、急性期を過ぎた患者を受け入れる後方施設が少なく、転院先を探すのに難儀をしています。当院では冬期に救急搬送が増加するため、満床近くになると１次２次救急をお断りせざるを得ない事態になり、近隣の病院にご迷惑をおかけしていて大変申し訳なく思っています。

４.新型コロナウイルス感染の流行を経験して苦労したことなどエピソードがあればお願いします。

新型コロナウイルス感染が拡がり始めたころの院内のムードは「どうせ軽症なのだろう」くらいの認識でした。闘う相手のことがまるで分らないまま、感染者が爆発的に増え始めたときに院長に就任しました。当院には感染症病棟はありませんし、病院の構造や導線が感染症には向いていません。また、４人部屋にはトイレがないため、主に個室でしか受け入れができません。

病院全体で知恵を絞り、救急外来での発熱者への対応、入院病棟の検討と病棟スタッフの人選、新型コロナ感染者の緊急手術への対応、ECMOのシミュレーションなど多くの問題への対策を始めました。院内のアルコールの備蓄が少なくなってきたところで、市内の複数の酒造会社からアルコールや清涼飲料を寄付していただき、感謝に堪えません。あちこちでつまずきながらも、2020年11月よりコロナ病棟/ICUを開設しました。ICU 12床（10床で運用）を中央で区切って目張りをし、陰圧室がある側をコロナICUとして、陰圧室以外も緩い陰圧がかかるようにしました。おかげで一般ICU6床が常に満床となり、同じフロアの救急病室を使って対応しました。一般病室も足りず、しばしば１次・２次救急の受け入れをストップしたため、近隣の病院からお叱りの電話をいただくこともありました。手術室では陰圧室にあったda Vinciを隣室に移動させたところ正常に作動せず、部屋の配電盤を取り換えるなどのトラブルが発生しました。院内クラスターも経験しました。2020年末には、挿管中の合併症のある患者の状態が悪化してECMO作動も考慮しましたが、ステロイドパルスの繰り返しで改善し、独歩退院されました。

県またぎの移動が禁止されていても、広島県から通う職員・学生や、家族が広島県に通勤する職員がいるため、職員・学生の健康チェックには細心の注意を払いました。外食・会食や移動の制限が続くと職員のストレスが溜まるので、発生状況をみながら、緩和したり強化したりの繰り返しでした。特定の診療科や職員に負担が集中しないよう、みんなで支えあって全職員が一丸となってここまでやってこられたのだと思います。

５.先生ご自身のことについて教えていただけますか。

私は岡山市の出身で、昭和56年に自治医科大学を卒業して岡山県に就職し、２年間のローテート研修ののち僻地へ赴きました。最初の赴任地は県北の医療過疎の豪雪地帯にある医師５人体制の町立病院でした。３町村で8,500人の人口に対し、病院と診療所が一つずつ、開業医ゼロという地域でした。自治医大卒の２名が無医村の診療所も掛け持ちし、３町村の健診から予防接種まで２人で対応していました。当初、皮膚科医を目指していましたが、後期研修は岡山済生会総合病院の形成外科で１年間学び、その間、２か月半ほど東京大学形成外科でマイクロサージャリーの練習と見学をする機会を得ました。義務年限の最後の２年間は県西部の町立病院に勤務し、義務年限終了後は岡山で形成外科医として17年間勤務しました。専門はマイクロサージャリーを用いた再建外科です。

学生時代は空手道部に所属していました。趣味は、淡水魚好きが昂じて魚類学会員となり、現在では岡山でアユモドキやスイゲンゼニタナゴなどの絶滅危惧種の保護活動をしています。また、学生時代から自炊していて、料理を作ることも食べ歩きも好きで、赴任以来自炊をしています。他の趣味としては、音楽鑑賞（ジャンルは何でも　特にHR/HM)、博物館めぐり、写真などです。座右の銘は「平常心」です。

［あとがき］

この度は青先生よりとても貴重なお話をいただきました。特に、先生が病院長に就任されたタイミングがちょうど新型コロナウイルス感染の流行が本格化してきたころと重なることもあり、ご対応に苦労された様子がまざまざと伝わってきました。山口県東部を支える重要な医療機関の一つであり、私たち開業医も普段からとてもお世話になっています。現在も新型コロナウイルス感染の流行が継続中ではありますが、各医療機関が協力し合い地域の方たちの健康維持に貢献していけたらと思います。